

薬

薬や薬局に関する広告文化

平井 有(ひらい・たもつ)

東京都薬剤師会北多摩支部副支部長、立川市薬剤師会会長代行

Art gallery

第一
展示室

マッチ



↑薬の広告

↓薬局の広告

現代では医薬品配置売業と呼ばれますが、かつては置き薬屋さんと呼ばれた富山をはじめとした奈良、滋賀、大阪、佐賀、熊本などの売薬行商人達は様々な置き薬と地方の話題や情報をして、「紙風船」に代表されるおみやげを全国各地に届けました。

「紙風船」がおみやげとしてよく使われたのは、子ども達が喜ぶこと、安価なこと、軽くてかさばらず持ち運びが楽なこと、そして何となくとも広告に見える六面ものスペースがあったことでした。

一方、昔の街のくすり屋さん（般販売業、薬局、薬種商販売業）も置き薬屋さん同様、様々なおみやげや景品をお客さんに配りました。その中に「紙風船」と同様に制作費が安価で広告面が自由に使える「広告マッチ」がありました。

家庭用電化製品の普及や使い捨てライター（百円ライター）の登場で今ではマッチを手にすることはほとんどなくなりましたが、広告を描いた小型マッチは、手頃な製造価格と広告面の広さや自由さなどから昭和の三十年代に全盛期を迎え、当時はコレクターもかなりの数がいたようです。

「広告マッチ」は大きく分けて、①薬の広告、②薬局の広告、③表と裏で両者を兼ねたものがあり、縦書き、横書きなどの分類もできます。文字が右から左に向かつて書かれているものは戦前のものです。また、今は使わない病名が書かれていたり、大正から昭和初期のアルテコ調のデザインなどもあり、物心両面でも今以上に豊かな時代だったことがうかがえます。

薬局の広告には、調剤必須の神器として、天秤や乳鉢・乳棒、メスシリンダーなどをデザイン化したものや博士風に図案化された薬剤師の姿が多く見られます。この時代の薬局薬剤師にとって、調剤業務が大きな念願だったことが伺えます。

